第20回松方ホール音楽賞 ―― 来月4日・授賞式、記念コンサート

次代の音色 響かせて

■「音楽賞」3人、「奨励賞」2人

クラシック音楽の若手演奏家を対象とするコンクール「第20回松方ホール音楽賞」の授賞式と記念コンサートが、2月4日午後3時から神戸ハーバーランドの神戸新聞松方ホール（☎078・362・7191）で開かれる。今回は、ピアノ、バイオリン、木管楽器、声楽（歌曲）の4部門に、国内外から計109人が応募。「音楽賞」はバイオリン部門に該当者がなく、残る3部門各1人ずつの計3人が、「奨励賞」にはバイオリン、声楽部門から各1人の計2人が選ばれた。次代のクラシック界を担う受賞者の横顔を紹介する。（敬称略）

力強い演奏で道を開く

ピアノ

生熊（いくま） 茜（あかね）

高校時代から挑戦を続け、ついに栄冠を手にした。「5回は受けたかな。でもすべて予選でアウト。もう縁がないのかと少し遠ざかっていたけれど、結果を出せて良かった」とほほ笑む。

大阪府吹田市出身。5歳から音楽教室に通い、幼稚園では音感教育も受けた。小学2年生のとき、テレビで見たショパンコンクールのドキュメンタリー番組に感動。同府内の公立高校で唯一音楽科を置く府立夕陽丘高校を目指した。同校から東京芸術大学に進み、2015年4月から京都市立芸術大大学院修士課程に在籍する。

「いつもなるようになるさ精神」といい、力みなく自然体だが、受賞は感慨深かった。既に全日本学生音楽コンクール中学校の部、高校の部でいずれも全国1位になり、高い実力は広く知られていた。が、「高校時代以降は大きなコンクールのタイトルが何もなく、行き詰まり感があった」と振り返る。

「関西でやっていこう」。そう決意し、地元へ帰ってきた翌年、松方に挑戦。「うれしさと安堵（あんど）の両方がある。ここから道が開けてくれればいい」と受け止める。

もう一つ。昨年4月から母校で高校講師となり、子ども時代からの夢「ピアノの先生」がかなった。「すべての時間を自分のためには使えないので、限られた時間との向き合い方を探っていた。松方は教え始めて初のコンクール。教師と演奏家を両立していけるという自信になった」

たおやかな雰囲気だが、エネルギッシュな曲を好み、力強い演奏が持ち味。コンサートではラフマニノフの曲集「音の絵」から抜粋して奏でる。

「いろんな表情が詰まっていて練習曲で終わらせるのはもったいない。曲ごとの個性を出しつつ、一つの曲集としての魅力を表現したい」

吹田市在住。24歳。

作曲者の意図 伝えたい

木管楽器（クラリネット）

森（もり） 奈穂子（なおこ）

初めて演奏する現代曲で予選に挑んだ。独・ミュンヘン出身のイェルク・ヴィトマンの「ファンタジー」。「大学時代に楽譜を買い、いつかやりたかった曲。重音で始まり、幻想的な雰囲気が自分に合っていたから」と話す。

実はコンクール直前、金沢市でヴィトマン本人の演奏を聴く機会があった。

「曲は違ったけれど、作曲者の世界観に触れ、自信を持って臨めた。演奏することを伝えるとすごく喜んでくれ、『最後の主題は最初のときより速く演奏するんだよ』とアドバイスをいただいた」と振り返る。楽譜の表紙にもらったサインもお守りになり、本選ものびのび演奏できた。

クラリネットとの出会いは中学時代の吹奏楽部。体験会で先輩が奏でるホルストの「木星」の四重奏を聴き、温かな音色に魅了された。吹奏楽コースがある大阪桐蔭高校を経て京都市立芸術大学を卒業。現在は主に関西のオーケストラでエキストラをしつつ、富山県の桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程で学ぶ。

「高校までは吹奏楽ばかりしていたけれど、大学の授業でオーケストラを初めて間近で聴き、弦楽器が入った重厚な響きに感動した」と振り返る。「吹奏楽では人数が多いクラリネットが弦楽器の役割を担うが、オーケストラではファーストとセカンドでも役割が異なり、ソロで奏でる部分もあり、存在感がある」と語る。将来の夢は、日本のオーケストラに入ることだ。

コンサートの曲は、バーンスタインの「クラリネット・ソナタ」とイーズリー・ブラックウッドの「エスクラリネット・ソナチネ」。いずれも初挑戦で、それぞれ異なるクラリネットで吹く。「高音域のエスクラリネットで奏でるソナチネはかわいらしい曲。作曲者の意図を伝えられるよう奏でたい」

奈良県出身、在住。25歳。

イタリアの舞台 目指し

声楽（ソプラノ）

小川（おがわ） 栞奈（かんな）

ソプラノでも華やかなコロラトゥーラ。オペラ専攻ながら、今回は歌曲での審査に初挑戦し、大きな収穫があった。

「歌曲はオペラと違い、短い1曲で世界観を創らなければならない。しかもそれを今回は5曲続けて。バテずに歌い切れるかを何度も練習で確認した。普段はイタリア語が多いが、講評では不慣れなドイツ語を褒められ、自信になった」

栃木県出身。小学1年から地元の児童合唱団で歌った。小学6年からは本格的な声楽レッスンに通い、卒業文集につづった将来の夢は「世界で活躍できるオペラ歌手」だった。

東京芸術大学を経て同大大学院1年になった今も「歌っているときが一番幸せ。お客さんが多いほどうれしく、緊張もしない」と夢を追い続ける。

2016年はコンクールに明け暮れた。松方ホール音楽賞のほか、全日本学生音楽コンクールなど五つに挑戦し、すべてで1位に輝いた。大学の課題と両立させながら「とにかく目の前のことに集中してこなした。余韻に浸っている暇もなかった」と振り返る。

快挙の要因は何だったのか。転機となったのが、一昨年夏のイタリア・シチリア島滞在だった。日本のマスタークラスで出会った元オペラ歌手のジュゼッペ・コスタンツォ宅で1週間余り、泊まり込みでレッスンを受けた。「新たな体の使い方、発声法を教わり、明らかに声が豊かになった。あの経験がなかったら今の私はない」と感謝する。

記念コンサートでは、旋律の美しさにほれ込んだベッリーニの歌劇「夢遊病の女」のアリアを披露する。「後半に出てくる、高音域で音を転がすように歌う速いパッセージが私の強み」。いつかイタリアの歌劇場の舞台に立つ日を思い描きながら歌う。

東京都在住。23歳。

祖父の言葉 胸に進む

奨励賞

バイオリン

落合（おちあい） 真子（まこ）

誰もが耳にしたことがあるメンデルスゾーンの名曲「バイオリン協奏曲」をピアノ伴奏で披露する。「冒頭の旋律から美しく、憧れていた。オーケストラの譜面も見て勉強している」と意気込む。

米国で幼少期を過ごし、6歳でバイオリンを始めた。「本当はギターをやりたかったけど、子ども用がなかったから。スタートが遅かった分、自由に楽しめているのかも」と話す。

小学4年のとき、兵庫県立芸術文化センターの佐渡裕芸術監督率いる「スーパーキッズ・オーケストラ」に入団。「佐渡監督から音楽を通じた人とのつながりや人生の哲学を教わり、取り組み方が大きく変わった」

無類の本好き。特に司馬遼太郎の歴史小説がお気に入りだ。「読書はいろんな世界に入り込める。曲の表現を考えるときの引き出しにもなる」と音楽性を豊かにすることにも意欲的だ。

昨年は12月に全日本学生音楽コンクール中学校の部で全国2位に。今年4月からはサントリー芸術財団保有の名器を貸与される。「貸与決定の数時間前におじいちゃんが亡くなった。激励の贈り物かな」と受け止めた。

諏訪内晶子のような演奏が目標。「祖父も大切にしていた言葉『今を一生懸命生きる』。そうすれば進むべき道に導かれるはず」

大津市在住、15歳。

母校の後輩に元気を

奨励賞

声楽（ソプラノ）

田中（たなか） めぐみ

2年前に続き、2度目の挑戦だった。「幸運にも予選を通過でき、本選ではもう一度歌わせてもらえるありがたみをかみしめた」と話す。

舞台に立てば「もうやるしかない」と思い切れる開き直り型とか。そして必ず笑顔。歌うことが大好きだから、自然とそうなる。

京都府京丹後市出身。小学3年から地域の児童合唱団で歌った。当時、全国で強豪だった合唱部がある隣町の高校に進み、武庫川女子大学音楽学部声楽学科、同大音楽専攻科で学んだ。現在はプロ合唱団の神戸市混声合唱団に所属する。

躍進を支える心強いパートナーもいた。同コンクールで多くの入賞者の伴奏を担ってきた藤江圭子。同大学時代の恩師でもある。

コンクールでは、藤江から「あなたの声に合っている」と勧めてもらった思い出のシュトラウスの「響け！」と「愛の神」を歌った。「先生に伴奏してもらい、身が引き締まる思いでした。当日は自分のことだけに集中できた」と感謝する。

小品であっても物語が詰まった歌曲が好きだ。記念コンサートではシュトラウスの2曲も披露する。

「母校の大学は他の音大に比べ、まだまだプロを志す人が少ない。後輩を元気づけられる一人になれたらうれしいです」

西宮市在住、29歳。